

## 「『つながり格差』が学力格差を生む」(志水宏吉著)を読む(その2)

「子どもたちに学力をつける」というと、一人ひとりの子どもに対しての営みとして受けとめるが、「子どもたちの学力向上を図る」というと、集団としての学力の数値を上昇させる意味になる。微妙な違いだが、学校現場ではいままで「学力向上」という視点はほとんどなかった。なぜならば、目の前の子どもたちの学力は問題にしても、子ども集団の「学力」を他の学校や地域、国と比較して、目の前の子どもたちの平均が高いか、あるいは低いかを考えることに意味を感じていなかったからだ。だから学校現場では、「学力向上」が叫ばれ始めると、なにか違和感を持ち、時には反発さえも感じる。

こうした反応はしごく当然のことなのだが、ここで気をつけなければならないのは、このような違和感や反発の中にあることで、進行しつつある重大な負の変化(例えば「子どもの貧困」など)を見逃してしまう危険性があることだ。「学校」「教室」という「教育」の枠だけでは越えることのできない「社会的な状況」への感性を鈍らせてしまうことがありはしないか、という危惧である。

学力向上が社会問題化された以降、日本全国で様々な取り組みがなされたが、大別すると三つに分けられる。一つ目は、「学力テスト対策」とでもいうべき取り組みを、県や市の教育委員会主導で行ったところ。二つ目は、数値目標を掲げるなどして、授業の取り組みを向上させるよう、先生たちのおしりを叩いたところ。三つ目は、学力テストの数値は「学力の一部」として、全国的な競争から距離をとろうとしたところである。この三つに大別される「反応」のどれがよいということではないが、どれも「大人側の事情」であり、「子ども側のニーズ」から学力の問題をとらえてはいないことは共通していると言える。

ところがここ数年、全国学力・学習状況調査の結果の見方に関して、すこし違った角度からのアプローチが増えてきた。それは、社会学的な角度からのアプローチといってよい。ここに、「学力テスト」が持つ意味の転換が生まれようとしている。

この「全国学力・学習状況調査」が「学力の実態を把握する」とは言いつつも、新自由主義的な「市場原理・競争原理」を背景にしていることは周知のことだ。この流れからすれば、比較や競争に学力が使われたのは当たり前ともいえる。だから「いかに平均正答率を上げるか」ということに重点が置かれてきたのだ。しかし、社会学(教育社会学)の手法によって「学力の社会的背景」を分析することで提示されたのは、「子どもたちにとって好ましくない社会の動向」であったりする。それらは、子どもたちに発言権があれば、「何とかして欲しい」と改善を要求するであろう事柄ばかりである。言葉を変えれば、学力調査を社会的に分析することで、子どもの側から社会状況を描き出している、とも言える。

志水宏吉氏のこの著作の意味を、まずはこの視点から捉えなければならない。反発を感じながら、「学力向上」の号令に背を向けているだけではだめなのだ。正面から対峙する中で、学力向上を学力格差の問題として「読み替え」ていく必要があるのだ。このことは、著作中の、大阪での橋下知事と志水宏吉氏との位置関係がとても象徴的にあらわしている。きわめて新自由主義的な手法としての「学力テスト」を逆手にとって、新自由主義の負の



遺産を明らかにしようとしているようにも思えるのだ。

志水宏吉氏は、「しんどい層」の子どもたちを学力格差の課題の中心に据え、経済資本と文化資本に乏しいこの「層」の子どもたちには、社会関係資本でのアプローチを提言している。社会資本を「つながり」としていることから、子どもを取り巻くつながりは家族や地域など、友だちなど多様ではあるが、氏はその中心的な担い手として「学校」の存在に期待する。「しんどい層」にたいして、経済資本や文化資本の低さをカバーしている学校の存在に注目し、「効果のある学校」「力のある学校」と呼んでいる。

日本の子どもたちの「貧困率」が世界的にも注目されるようになった現在、子どもたちの貧困格差は学力格差であり、それは「未来における格差の固定」につながるものが危惧される。今、学力格差を越えなければ、子どもたちの未来は奪われることになるのである。こうした状況の中で、「格差を越える可能性」を「学校現場」に求め、なおかつ「できるはず」であることを示してもらえたことは、とても力強い。

スクールバスモデルで示された「力のある学校」の一つ目の要素は「エンジン 気持ちのそろった教職員集団」である。ここでいう「気持ちのそろった」とは、「子どもが抱える課題に正面から向き合う」「子どもの現実から逃げない」という覚悟の気持ちが・・・という意味であろう。こうして考えてくると、学力・学習状況調査が示す「学力格差の実態」は、私たちにその覚悟を鋭く迫っていると言えるのではないだろうか。

蛇足だが、ひとつだけ付け加えさせていただくと、学力格差を「しんどい層」に焦点を当てて志水氏は論を展開した。しかし、学力格差は一部に起きるものではなく、大部分においておき始めている、といえる。学力・学習状況調査を始めるきっかけとなった「学力低下」論争にさかのぼれば、志水氏も「正規分布からふたこぶへの変化」を指摘されている。この「ふたこぶへの変化」こそが、格差の地すべり現象だったのではないだろうか。格差は「中間層が下方へ滑り落ちる」という、雇用や賃金の変容を映し出す形で起こったのではないだろうか。その意味では、ふたこぶの学力分布そのものが格差の象徴でもある。

もちろん志水氏は、「しんどい層」を強調して取り上げた。そして、氏の思いを受け取る私たち学校現場では、「しんどい層」という範囲を広げ、「滑り落ちる中間層」にも挑戦しなければならないと考える。それこそが、志水宏吉氏の意図なのではないだろうか。

## 定期総会・教育講演会のお知らせ

どなたでも参加できます！

日時 2015年2月21日(土)

定期総会・・・11時00分～12時00分

教育講演会・・・13時30分(開場 13時00分)～16時30分

「しんどい子を支えることは しんどい子のためだけじゃない」

大阪大学大学院教授 志水宏吉先生

講演会参加費 一般 1,000円 学生 500円 高校生以下 無料

場所 大和市渋谷学習センター 2階 多目的ホール

【理事のつぶやき】年末に「すたんどばいみー」の中学生勉強合宿があり、お手伝いを頼まれました。そこに、「エステレージャ・ハッピー」教室の、やんちゃをして学校で問題になっては教室に来てひとしき愚痴を話していく勉強嫌いの一人の中学生を誘いました。すると、学校では授業中立ち歩き、エステレージャでは5分と鉛筆を持たなかった彼が、カンボジア人やペルー人のスタッフを傍らに、他の中学生たちと一緒に、何時間も座って勉強を教えてもらっているのです。彼に必要なだったのは、目前に対峙して学習に引っ張ってくれる(ましてや「評価」を与える)人ではなく、傍らに座り、一緒に前を向き、ともに一歩を歩んでくれる存在でした。そんな存在としてエステレージャのスタッフとして彼の傍らに座っていたか？そんな存在になりうる外国籍の先輩や仲間と出会わせていたか？「お手伝い」はどこへやら、たくさん宿題をもらったのでした。(1)